

情報リテラシ - 教育のあり方

岩手大学附属図書館

飯岡 久美子

目次	1.はじめに
	2.情報リテラシ - 教育はなぜ必要か
	3.岩手大学附属図書館利用者支援サ - ビス (現状)
	4.情報リテラシー教育
	4 - 1 参画図書館
	4 - 2 私案
	5.図書館リテラシ - 教育
	5 - 1 利用者支援
	5 - 2 図書館員支援
	6.課題
	6 1 図書館組織統合
	6 2 図書館員の資質向上
	7.まとめ

1.はじめに

平成 8 年 7 月に学術審議会から「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化」について (建議) がだされたが、そのなかで、情報リテラシ - 教育への支援として、大学図書館の協力のもとに、全学的に取り組む教育体制の整備が提言されている。岩手大学図書館では、図書館委員会の下に「電子図書館化検討ワ - キンググル - プ」を設置し、平成 10 年 4 月から図書館の電子化に関する検討を重ねてきた。その中で、長期的な展望として電子図書館的業務で現在なされている各業務はもちろん、将来計画として情報の配信、学内情報の発信、研究開発と教育支援があげられている。その教育支援としてマルチメディア教材作成支援と情報リテラシー教育支援が取り上げられている。図書館員がどのように情報リテラシ - 教育にどのように関わり支援し進めていくべきか検討し、図書館リテラシー教育、図書館員リテラシー教育をも考える。

2.情報リテラシー教育はなぜ必要か

リテラシー (literacy) とは、読み書きの基礎能力のことであり、情報リテラシーとは情報を使いこなすための能力、情報活用能力ということになる。具体的には読み書き (ワ - プロ)、ソロバン (表計算)、電子メール」を使いこなす能力のことをいう。*)情報の歴史は、ことばが文字を生み、ことばを書くことによって知識 (情報) が伝達され、保存され、再読修正できるようになった。書物の始まりである (記録された知識)。書物の活字

知識（情報）が電子化によりひろがり内容が増え、いまの高度情報化社会を促した。

日本における情報リテラシーの定義 *)

情報の判断、選択、整理、処理能力及び新たな情報の創造、伝達能力
情報化社会の特質、情報化の社会や人間に対する影響の理解
情報の重要性の認識、情報に対する責任感
情報科学の基礎及び情報手段（特にコンピュータ）の特徴の理解、基本的な
操作能力の習得

をみると解るようにコンピュータだけではなく情報（知識）すべてに対する定義である。情報（知識）をどのように利用し活用するかが問題なのである。

調査によるとインターネットを利用している研究室は 96.9%もあり、60%は3年以上の利用歴と結果が出ている。*)この点においても情報リテラシー支援の必要性が認められる。

高度情報化のなかで大学図書館では各種の情報サービスが求められ、1.でも述べたように学術審議会（建議）に於いては大学図書館の情報リテラシー教育支援が必要と提言された。

（注）レポートでは図書館利用者への学術情報リテラシー教育は図書館リテラシー教育とし情報リテラシー教育とわけて定義する。

3. 岩手大学附属図書館利用者支援サービス（現状）

利用者支援のための講習は特に行っていないが、図書館資料の検索、電子的情報資料の検索、データベース検索など利用者からの希望によりその都度有効的な指導を参考調査係に於いてなされている。リテラシーサービスのうち利用指導と情報検索の占める割合は平成9年度で約5%である。

（単位：件）

区分	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度
文献所在調査	8,949	9,087	9,254	11,136	12,621
事項調査	815	831	828	875	833
利用指導	225	459	513	563	588
計	9,989	10,377	10,595	12,556	14,042
上記の内情報検索	30	35	22	20	22

岩手大学附属図書館のインフォメーションの現状については下記のとおりである。

- ・ 新入生オリエンテーションに於いて図書館の簡単なガイダンスを行っている。
- ・ ライブラリーツアー

平成8年度より館内の案内や利用の仕方、OPACの使い方、インターネット体験など限られた時間（15-16時）での実施である。参加人数は入学生に対して約5～10%の割合である。

年度	月日	回数	参加人数	入学生数	利用者数
平成8年度	6月5-7日	9回(1日3回)	約60名	1,311名	3,429名
平成9年度	5月14-16日	9回(1日3回)	約60名	1,314名	2,957名
平成10年度	4月15-17日	9回(1日3回)	約120名	1,273名	2,692名
平成11年度	4月14-16日	9回(1日3回)	116名	1,274名	2,817名

- ・冊子 図書館利用案内（web上でも公開）、図書館概要、図書館時報(web上でも公開)の配布

4.情報リテラシー教育

4.1 参画図書館

従来、情報リテラシー教育に対して図書館はほとんど関与してこなかったが、電子的資料が今後ますます増えて行くことを考えれば、これに対する大学図書館の積極的な協力がのぞまれている。すでに、いくつかの大学では情報リテラシー教育が図書館も協力した形で実行されている。その参画図書館平成10、11年度の実例をあげてみました。

<別表> 京都大学附属図書館、新潟大学附属図書館、山口大学附属図書館、金沢大学附属図書館

- ・各大学とも情報検索について2コマから6コマの計画である。
- ・科目名について新潟大学以外は何らかのかたちで「図書館」がうたってある。
- ・新潟大学の対象が文系学部と限定している。
- ・京都、岡山大学は論文・レポート作成の目的がある。
- ・金沢大学は「見学案内」をいれ、図書館に興味を持たせ図書に触れ楽しむ機会を取り上げている。
- ・岡山大学は「新聞を読む」をいれ、新聞の読み方と記事の利用の仕方を取り上げている。
- ・京都大学は対象が1-4回生であるが、授業計画にはコンピュータの基礎的知識操作が取り上げられていない。コメントとしてパソコンの熟知があげられているが、そこには必然的にコンピュータリテラシーの教育の必要性があげられる。
- ・新潟大学は対象が2年生以上にも関わらずパソコンの基本機能と操作がとりあげられておりコンピュータリテラシー教育がなされている。
- ・図書館員は受講生6～10名に対し1名である。

4 - 2 私案

平成12年度より本学でも全学教育体制見直しにより情報リテラシー教育が教養科目の一つとして実施される。電子化された資料(情報)を備えた図書館がこれに参加し、支援することを前提に、部分的ではあるが他大学を参考に私案をたてた。

方針・現在決定しているのは、「情報基礎」2単位、全学部1年前期または後期。

- ・本学は情報学を専攻する教授陣がいるので講義は教官であること。図書館員は補助者である。教官と図書館員の十分な話し合いがなされること。
- ・カリキュラムは学術情報支援サービス分科会編、「ネットワーク時代の学術情報支援」開成出版、1995)をも参考にした。
- ・大学以前の教育でのコンピュータ教育と情報教育は確立されていない前提があること。

	カリキュラム	図書館員補助
科目	情報基礎	
単位	2単位	
対象	全学部1年生(必須が望ましい)	
目的	情報学の基礎を理解し、情報資源の活用の仕方を学ぶ。パソコンの機能と操作、コンピュータネットワークの入門、レポート論文作成のための情報検索、活用技術を習得する。	情報リテラシー教育を支援すると共に、図書館員の資質の向上をはかる。講師補助者としての役割を知る
授業内容	1 情報とは何であるか	
	2 パソコンの機能と操作	*演習 パソコンの初歩的な操作
	3-4 コンピュータネットワーク入門 岩手大学コンピュータネットワーク、ネットワークで守るべき事柄、メールサーバへの登録方法、電子メールの使い方、ホームページの見方、図書館情報システム、セキュリティについて	*図書館情報システムの説明 図書館ホームページの見方、岩手大学蔵書データベース検索
	5-6 情報の検索(目録情報) 図書	*演習 岩手大学 opac、日本書籍総目録(インターネット上)、NACSIS-webcat、国内図書館 www 上 opac の検索
	7-8 情報の検索(目録情報) 雑誌	*演習 岩手大学 opac、NACSIS-webcat、国内図書館 www 上 opac の検索(マニュアルの作成)(調査研究手順)
	9-10 インターネットの情報と利用	*演習 NACSIS-ELS 電子図書館サービスの利用、インターネット情報検索(各種のホームページ)、様々なツールの紹介(参考資料)、各サーチエンジン検索

	11-12 データベースの情報と活用	*演習 岩手大学 CD-ROM データベース (MEDLINE, 12CionCDwithAbstracts, CaonCD, 雑誌記事索引) の活用, NACSIS-IR 情報検索サービスの利用
	13 まとめ	*アンケートの回収、分析、検討
テキスト	コンピュータネットワーク入門 (監修三浦守 1997.8) 他教官指定資料	

授業内容の目的 1 情報の概念を知る

2-4 情報処理システム知識を理解する

5-8 必要な情報をいかに効率よく入手するかを知る

9-12 利用技術の取得、活用、能力を理解する

まだ、未決定な部分が多い中で私案をたてるのはかなりの無理がありましたが、立案をとおして情報リテラシー教育は図書館リテラシー教育と重複する部分が多く有効的でないことが解りました。高度情報の検索になると専門分野毎の演習、検索した情報で図書館を通しての入手方法の指導も必要となってくる。

4-1 と 4-2 のまとめ

- ・情報リテラシー教育と図書館リテラシー教育の有効的な実施が必要である。
- ・目的、内容をどの程度まで習得、理解させるのか。(分野毎)(受講生レベル、初・中・上級)を考慮にいれた演習の必要。
- ・図書館員何名で対処するのか 資質(能力)の問題 事前研修の必要が出てくる。

5 図書館リテラシー教育

5 1 利用者支援

多大な学術情報資源を有する大学図書館に対して、公開を求める社会的要請が高まる現在、地域に根ざした大学図書館ということで学外者の利用率が上昇している。そこで、利用者への支援として図書館リテラシー教育の他に利用者へのオリエンテーション、インフォメーションサービスとコンピュタリテラシー教育(コンピュータを使いこなす能力)も必要とされる。図書館リテラシー教育の目的は、図書館をとおして情報資源の効率的な利用方法を知り入手できる図書館に対して自立した利用者を育てることにある。その過程において図書館員もよりよいサービスを学習できる。図書館員は利用者への一方的な知識の伝達ではなく相互作用(教育 学習 教育)の累積により資質の向上にもつながる。インフォメーションサービスの方法としては紙媒体での配布、電子的媒体のサービス、人的媒体の図書館ツアー、各講習会・講座の実施があげられ、電子的媒体ではホームページの充実、各目録検索マニュアルのヘルプ機能の充実が必要とされる。Web 上から学術情報コンテンツに対して一元的にアクセスできる大学もある。*)人的媒体の講習会については利用者の対象レベルごとの実施が望まれる。実例項目は下記にあげる。

琉球大学では「Library Workshop Program」として「図書館の使い方」「図書館の利用法」「レポート・論文作成のための電子的メディア活用講座」「図書館における電子メディア利用のためのパソコン基礎講座」の講習会を行い、情報リテラシー教育を体系化している。*)

教育研修事業の基本的業務として企画・立案・広報、受講者の決定、研修の決定・通知、研修の実施、受講者へのフォロー、評価まで（目録所在情報サービス関連研修項目）をあげるとかなりの業務量であり、研修の概念に講習も含まれるとするなら、専従担当部署のないところでは平行業務となり負担が大きくなるという問題も当然出てくる。

- 講習会例*)
- | | |
|-------|---|
| 初級 | * パソコン講習会 |
| | * オリエンテーション（利用案内） |
| | * 蔵書検索講習会（OPAC 講習会） |
| 中級、上級 | * インターネットによる情報資源検索講習会（webcat） |
| | * 上級文献検索講習会（人文社会科学分野、自然科学分野） |
| | * データベースの利用講習会（medline, current contents, 雑誌記事索引、Nacsis-IR） |

5 - 2 図書館員支援

図書館員でも一人一台のパソコンの所有率になっている昨今、事務の能率のためにもコンピュータの積極的な活用が求められている。図書館員の情報リテラシー習得のレベルもさまざまであると考え、利用者支援以前のパソコンの一定の基礎的な知識と技術を習得するために、下記程度のことは必要と考えられる。（東京大学情報基盤センター図書館員研修内容）

- * windows95 の基礎的な知識と操作の習得
- * 電子メールの基礎的な使い方
- * HTML 文書の基礎的な作り方
- * ホームページの作り方
- * ネットワークの基本知識

6 課題

6 1 図書館組織の再編

小・中模図書館での情報リテラシー教育が機能を十分に効率的になされるには、情報リテラシー教育機能を持った施設（情報処理センター）と図書館リテラシー機能を持った施設（図書館）の統合（仮称総合情報センター）があげられる。「科学技術創造立国を目指す我が国の学術研究の総合的推進について－「知的存在感のある国を目指して－」1999.5(学術審議会中間まとめ)では、図書館、大型計算機センター、総合情報処理センター等は設置目的がことなるが、教育研究支援という目的は同じである。学内の人材や機器等の有効な活用の観点から、有機的な連携の強化や組織の再編成・一体化などの工夫が必要。（概略）としている。組織の統合には全学的支援が不可欠である。

統合ではないが、大学の情報基盤整備に対する要求に対応して平成 11 年東京大学情報基盤センターが発足した。大型計算機センターと教育用計算機センター、図書館の一部を改組して、研究と情報業務の両機能を持ち、確立した情報サービスを提供するものである。

全国共同利用施設なので、将来、ネットワークによる全国的な情報リテラシー教育も期待できるのではないだろうか。

立命館大学では、1998年4月に図書館と総合情報センターが統合再編され、双方が有する機能の統合を図ることにより教育・研究機関としての学園の諸活動をより高度なレベルで支援してゆくことが可能となるとしている。

6.2 図書館員の資質と向上

琉球大学「Library Workshop Program」実施の影響として図書館職員の変化が第一にあげられ、情報リテラシー教育を実施するという事は、図書館職員自身の涵養のための一手段でもあり、ポジティブに受け止めなければならないとしている。*)5-1で述べたように利用者支援の過程においても同様のことがいえる。

資質に能力も含まれるとするなら、米国専門図書館協議会での図書館専門職の持つべき能力の中に「業務内容に応じた専門分野の知識」「情報ニーズに応える付加価値のある情報サービスやプログラムの提供」*)があるが、情報リテラシー教育にも必要な能力であると思う。その能力を向上するために、当然各種研修に参加し専門知識を習得することも必要である。

7. まとめ

京都大学の演習の反省点に、1年生では、コンピュータの初歩的操作ができないことが掲げられているが、文部省では大学以前の高等学校においては普通教科として「情報」を新設し、生徒が興味・関心などに応じて選択的に履修（必修）できるよう、情報リテラシーに重点をおく情報A、科学的仕組みの理解に重点をおく情報B、情報化の社会的影響等の考察に重点をおく情報Cの3つに分類している。これにより指導要領が改定され1999年3月に告示され2003年度から学年進行で実施されることになっている。それまでは、大学としてコンピュタリテラシーも必要となり、それを習得した上での情報リテラシー教育が必要とされる。教官と図書館員が協力しあって授業を受け持ち、そのなかでの図書館の果たす役割は、情報基盤教育をともに運営しながら、最終目的として、高度情報化に対応した国際レベルでの情報の活用、その技法、入手までのサポートにあると思う。エンドユーザーへのサポートが有効的になされるには組織の統合とそれを支援する図書館員の資質の向上を課題としてあげたが、それと共に基盤の充実（物理的環境）と電子図書館の繁栄の両者が必須であることも付け加えておかなければ成らない。

最後に、事前研修が思うように進まず本研修の本意にそぐわないレポートで満足のものではないが、これを「はじめ」としてリテラシー教育に取り組むと同時に、自己資質の向上に努めたい。資料を提供くださった目録情報課の皆様はじめ、三週間におよび研修生活をサポートくださった熊淵智行氏と研修課の皆様に深く感謝いたします。ありがとうございました。

- 参考文献 岩手大学附属図書館の電子化について (平成 11 年 2 月 23 日)
「デジタル・コンテンツ時代の読み書きそろばん」宮澤彰
<http://www.nic.ad.jp/jp/research/report/1998/index.html>
大学図書館研究 no.54 (1998.12)
第 17 回大学図書館研究集会報告書 (1999.9)
大学生と「情報の活用」 情報検索入門 (1999.3 図書館協会発行)
情報化白書 1999 (1999 コムピューター・社)
平成 10 年度総合目録「海外実務研修レポート「大学図書館をとりまく
新たな局面での利用者サービス」(神戸女子大学図書館後藤幸)
米国の大学図書館等視察報告書(平成 10 年 12 月)東京大学附属図書館

<別表> 情報リテラシー教育参画図書館

項目	京都大学附属図書館（平成 10 年度）	新潟大学附属図書館（平成 10 年度）	岡山大学附属図書館（平成 11 年度）	金沢大学附属図書館（平成 11 年度）
科目名	情報検索入門 図書館とインターネット情報の活用	情報検索とその応用	学術情報の検索と活用 - 図書館を利用する -	大学図書館への招待 みずから学ぶ、図書資料を楽しむ
単位	2単位	2単位	2単位 前期	2単位 前期
対象	全学向1 4回生	文系学部2年生以上	全学部	全学部
目的・マ	論文レポートを書くための文献情報収集、卒業論文作成のための文献調査等に必要な情報活用技術を演習によって習得させながら情報図書館学情報探索学の概要を学ばせる	情報科学の基礎を概観し様々な情報資源を活用することを学ぶ。具体的にはパソコンの操作から始めて図書資料を中心とした文献の検索やインターネットについて学習しながら情報源の調査、情報の収集、情報の蓄積と利用における力の習得を図る。	高度情報化社会の学習においては、様々な情報資源を活用しながらレポート等をまとめることは必須になっている。そこで、この授業においては情報の読み方や学術情報等の検索を通じて情報源の調査、情報収集の手法とレポートのまとめかたについて学ぶ図書館情報系の演習により、多様化した情報リソースへのアクセス法の習得を図る。	総合科目として大学図書館を取り上げながらそのリレーションを試みる講義演習を通じて図書館に興味を持たせ図書に触れ楽しむ機会を与える。図書館の利用、学術情報利用の方法を学ぶ。
授業計画	1 大学図書館への招待 2-3 分類の一般理論と分類理論 * 4 情報の種類 5-6 目録情報とその利用法 * 7-8 データベースの種類とその利用法 文系理系で分かれ半回講義半回演習 9-10 インターネットの情報と利用法 * 11-12 参考資料の種類とその利用 * 13 図書館情報、および図書館の種類とその機能 注 * 1回演習	1 図書館と情報化社会 2-3 パソコンの基本機能と操作 * 4 E-mailの使い方 * 5 学術情報の使い方 6 情報検索概論 * 7-9 雑誌等情報検索 * 10 レポート作成に向けた説明と演習 * 11-13 図書館情報検索 * 14 総合演習（演習） 注 * 講義と演習	1 総論 2 情報処理理論 3-4 インターネット、情報検索演習 * 5 情報を利用する 6 新聞を読む 7 情報を探す 8-9 学術情報検索 雑誌情報検索 * 10 学術情報検索 図書情報検索 * 11-12 学術情報検索 テーマ設定による文献検索 * 13-14 論文の書き方 15 ディスカッション 学術情報検索論全般について 注 * 演習	1 はじめに 大学図書館のいま 2 金沢大学附属図書館リレーション(見学) 3 附属図書館の上手な使い方 4 歴史資料の面白さ 5-6 学術情報の入手と学術情報センターの役割 7 金沢大学所蔵資料の紹介 1 8 科学史研究と図書館 9 美術史研究と図書館 10-11 金沢大学所蔵資料の紹介 2 - 3 12 医学部分館工学部分館案内 13 図書館の仕事 14 まとめ 電子図書館化をめぐる
テキスト	Access.txt-文献調査・利用ガイド（京都大学附属図書館発行） *大学生と「情報の活用」情報探索入門（1999.3発行）	大学で役立つ情報検索（1998発行）	参考書 野口悠紀雄「続「超整理法.時間編」（中公新書）1995 情報アクセス研究会「現代人のための情報収集術」青弓社 1995	
図書館職員	演習を15名の図書館職員が担当する（受講生10名に対し1名）	講義と演習に教官の補助として参加する（受講生50名に対し8名）	担当教官が館長。図書館員は演習の協力者（受講生50名に対し9名）	1,2,5,6,11-13 は図書館が企画、実施したもの。演習は講義と演習の2班にした(受講者80名に対しのべ18名)
Nacsis	・「目録情報とその利用法」(5-6週) 文献と情報の所在を突きとめるに於いて -学術情報センターの総合目録データベース www.検索サービスで webcat の説明。演習課題のサンプルに webcat の詳細画面表示 ・「データベースの種類とその利用法」(7-8週) データベースの実例で NACISIS-IR の紹介		8-10「学術情報検索」において web-cat の使用	5-6 において学術情報センターの役割